

鹿の瀬（北淡町富島）

摂津（せつづ）の国（今の神戸あたり）の夢野（ゆめのの）（今の夢野（ゆめのの））という里に牡鹿（おじか）、牝鹿（めじか）の夫婦が住んでいました。ある日、牡鹿が、えさを求めて、淡路の野島（今の北淡町野島）へ渡ったときのことです。山の中ほどに、松のたくさんはえたところのやぶで、何物かが、ガサガサ動いているので、「いのししかな？うさぎかな？それとも…」と思いながら、おそるおそる近づいてみますと、パツと飛び出てきたのは、美しい牝鹿でした。

「あっ！」「あっ！びっくりしたわ。あなた、いったいどこから来たの？」

「ぼくは、海のむこうの摂津の国から来たんや。」

「あら、遠くからきたのね。」

こんな話をするうちに、二匹の鹿は、すっかり仲よくなってしまいました。

「じゃあ、きょうは、これで帰るけど、またあいに来てもいいかい。」

「ええ、いいわ、ぜひ来てね、さようなら。」



牡鹿は、摂津の里へ帰ってからも、野島の牝鹿のことが忘れられず、しばしば、淡路へあいに来るようになりました。野島に恋人の鹿が出来たことを妻の牝鹿が、知らないはずはありません。

「最近、うちの人は、淡路へばかり行って、あまり、わたしのところへ帰って来てくれないわ。毎日淋しい思いをしているのに。」

牝鹿は、くやしくて、しかたありませんでした。

ある日、牝鹿は、お月さまに祈りながら、「お月さま。どうか、夫とともに元どおり仲よくすごせますように…」とその時、聞きおぼえのある足音がひびいてきたのです。牡鹿が久しぶりに帰ってきて、たのしい一夜をすごした翌朝、牡鹿が、「昨夜、ぼくは、不思議な夢をみたよ。」



「どんな夢？」

「自分の背に、いっぱい雪がつもって、重くてしょうがないんだ。ところが、よくみると雪のまん中に、ススキのような草が一本生えて、ゆれている夢なんだ。」

「そう、変な夢ね。」

「そのススキのような草がゆれながら、ときどき青白く光るんだ。」

「この夢は、きっと不吉な夢なんだわ。ススキのような草は矢のことじゃないのかしら。」

「そうかなあ。」

「あなたがあまり、しょっちゅう、淡路へ行くから、今度淡路へ行ったら、獵人にうたれて、死んでしまうということじゃないかしら。」

ら。」

「そんなばかな。」

牝鹿も、その夢を、ほんとうのこととは思っていませんでしたが、夫の牡鹿が淡路へ恋人にあいに行くのをとめるために、必死でした。

そんなことがあって、しばらくは、牡鹿も少しは気持ち悪くて、淡路へは行きませんでした。

しかし、日がたつうちに、だんだん、野島の牝鹿が恋しくなってきました。

「よし、妻には、だまって、淡路へ渡ろう、あんな夢なんか気にしないで…」

こうして牡鹿が、淡路めざして海を泳いで渡っているときでした。陸まであと数百メートルという通いなれた浅瀬のところで、獵人の乗った船に出会ったのです。

「おーい、鹿が泳いどるぞ。」

「どれどれ。」

「ほんまや。」

「弓と矢をもってこい。」

牡鹿はびっくりしました。船の獵人たちが、弓矢でねらっているのです。必死で泳ぎました。あと少しだ。

どんどん矢が飛んできます。

「ああ、もうだめだ！」

必死に泳ぎながら、恋しい野島の牝鹿の顔や、摂津にいる妻の顔が浮かんだり、消えたり…

ついに、一本の矢が背中にささったのです。

「ああ、あの夢は、本当だったのだ。」

目がおぼろにかすみながら、あの時の夢のつづきのように、静かに、水中に沈んでいきました。

今も、北淡町野島に、浅瀬があります。この浅瀬を「鹿の瀬」と呼んでいます。

